

帰りゆく世界は西に

「暑さ寒さも彼岸まで」とは

よく言ったもので、三月もお彼岸を過ぎると気温も高くなり、めつきり春めいてきます。春分

の日はちようど彼岸の中日で、太陽が真東から昇つて真西に沈む日にあたります。私たちが

生命終えて後、帰つていく世界、彼岸の世界は西の方向と言われている。海のかなたに沈んでい

く夕日を眺めては、「あのお日さまの沈む方向に私の帰つてい

く本当の世界、阿弥陀さまの世界があるのだ」という想いを強

くしていったのです。

親鸞聖人が深く尊敬なさったという中国の曇鸞大師に、時の皇帝がご質問になりました。

「お浄土を真実の世界というなら、西と言わずどこでもよさそ

うなものではないか。どうしてわざわざ西にあるというのか」と。それに対して曇鸞大師は、

「凡夫というのは、一つに決めてもらわないと迷つてしまうのです」と答えられています。私たちが迷うことのないように、お

釈迦さまは西方を指して、「お

まえを待ち受けている世界があるよ」と、お示し下さったのです。

また、この時期各寺院で「彼岸会」が務められます。「私は年寄でもなく、悩みもありません。そんな私には宗教もお

寺も必要ないと思います」そのように思つておられる方も多い

ようです。宗教は、本来、人間がどう生きていくかを導く

ものですが、現代日本では宗教のイメージが混乱しています。

各家庭においても、宗教を意識せずとも生活が成り立っていると

思います。私たちが生きていく上では、思い通りにならないことが沢山あります。年をとれば心身の機能が低下し、病気の心配もあり、

何より死が訪れます。それをどう受け入れて生きていけるか。

そうゆう根本的な問題は、人間の知恵では解決しません。

宗教は、目の前の困りごとを都合良く解決するためのものでは

ありません。どんな境遇になつても、逃げずにその境遇を

引き受け、尊いいのちを大切に生きていくためには、その

人生に寄り添つてくれる依りどころと目的地が必要です。それが宗教の示すところ

です。お彼岸にお寺やお墓に参拝される折、眼を閉じて心の中に「沈んでいく夕日」を想つて下さい。生命を終えて帰つていく世界を想つていただきたいのです。

(『仏事の小箱』参照)